

でこの歌を詠んだものであらう。防人の歌を讀んでもやはり思を季節に及ぼさねばならぬのである。

父母も花にもがもや草枕旅は行くとも撃うてて行かむ

この歌も同じく遠江の國の丈部黒當の作である。父母を花として撃うてて持つて行かうといふ所に、純粹な感情が窺はれるが、やはり花に對してこの感をなしたので歌の意味が生きてくるのである。同じ國の防人の歌の中にある「父母が殿のしりへの百代草」といふのがあるが、この百代草について、菊花であるといふ説もあるが、しかし季節のことを思へば、やはり春でなければならぬと思ふ。

道の邊の茨うづらちの末すえにはほ豆まめのからまる君きみを離はなれか行かむ

上總の國の防人丈部鳥の作である。からまるの序に「茨の末にはほ豆」を持ち來つたのは、防人らしくて珍しいのである。しかしこゝにも既に豆の蔓の延びて居るのを見て詠んだ事に注意したい。都人ならば氣づかずにすんでしまふものを、東人なればこそこれを使つて序ともしたのである。道の邊に豆の蔓が茨の若い枝に匂ひまといつてゐる。そのやうにからまつて慕ふ子等を置いて行く事かと嘆いたのである。防人の出立に際しても春光は十

分に行きわたつてゐたのである。

三 月

北國にも梅櫻桃李の一時に咲き匂ふ春が廻り來つた。そのある日の夕に詠んだ歌である。

春の苑えんくれなるにほふ桃の花はなした照る道みちに出で立つたつ嬌せう嬌せう

吾が園うゑの李りの花はなか庭にわに散るはだれのいまだ残りたるかも

園一ばいに紅に咲き匂ふ桃の花は輝くばかりである。その下邊に出で立つ嬢子を配して花か人かと思ふ美しさを描いてゐる。名詞を重ねたやうな形の歌で、却つてそれがふさはしく感じられるのが前の歌である。この艶麗に對して、次の歌はむしろ清楚な感じを描いてゐる。白い李の花の與へる寂寥の思ひを、苑に消え残る雪かと紛ふといふ言葉で現してゐる。家持のやうやく油に乗つて來た時代で、それくゝの花の特色をよく描き出してゐる。はだれは斑雪で、半消え残るやうになつてゐる雪を云ふ。

春の日に萌はれる柳やなぎを取り持ちて見れば都の大路おもほゆ

二日、柳黛を攀ちて京師を思ふ、といふ題がある。支那では婦人が柳の新葉のやうな眉を描いた。その風習から柳の若葉を柳黛といふのである。芽の萌え初めた柳の枝を引き寄せて、遙に京の空を思ひやるのである。はれる柳は芽の萌え出した柳である。京の大路にも柳が植ゑてあつたのである。遠い國の春にあつて遙に京を思ふ情を柳に寄せてゐる。同じく家持の歌である。

もののふの八十をとめ等が挹み亂ふ寺井の上の堅香子の花

堅香子は今のかたくりであつて、紫色の可憐な花をつける。この歌もその花を詠んだのであるが、その咲いてゐる場處を説明するのに、をとめらの挹み亂ふ寺井の上、といふのが手段である。もののふのは、枕詞、八十にかかる。八十の嬢子は多くのをとめで、井の邊には朝な夕なに水を汲みに集つて来る。挹み亂ふは、水を汲むさはめきを巧みに叙してゐる。寺にある井のほとりに、をとめが多く集つて来て水汲みをしてゐる、その邊の楚々たる草花を描いたのである。同じく家持の作である。

尋常に聞くは苦しき喚子鳥聲なつかしき時にはなりぬ

三月一日に大伴の坂上の郎女が、佐保の家で作つてゐる。呼子鳥は春啼く鳥であるが、

三月になつて啼きはじめると見える。人を呼ぶやうな聲に聞えるので呼子鳥といふ。何時も聞けば却つて心が惱まれるのであるが、その初めに當つては、さすがにこれも懐しきものの聲である。季節の鳥を待ち設ける心が、こゝにも現れてゐる。

漢人も筏浮べて遊ぶとふ今日ぞ我が兄子花覆せよ

大伴家持の三月三日の作である。この日は上巳の節句で曲水の宴が催される。幾廻りも曲つて流れてゐる水に盃を流し、その流水の裾に人々は座して漢詩を作り、詩の出來た者が流から盃を取り上げて酒を酌むのである。その風流の遊びを寫して、此處には筏を浮べて遊ぶと詠んでゐる。花覆は、時の花を環にして髪飾とするものであり、風流の業となつてゐる。

奥山の八峯の椿つばらかに今日は暮さね丈夫の徒

同じ日の歌である。奥山の八峯の椿はつばらかにと云はんが爲の序であるが、山から椿を折つて瓶に挿してあるので、これを材料として使つてゐる。つばらかに今日を暮すといふのは、歡を盡すことを云ふ。人々に對してこの好き日を楽しく暮すやうにと勸めてゐる歌である。ちやうど椿の花の咲く頃で、この歌が詠み出されてゐるのである。

朝な朝な揚る雲雀になりてしか都に行きてはや歸り來む

三月三日、防人を檢校する勅使、并に兵部の使人等、共に集つて宴を開いた時の安倍沙美麻呂の歌である。防人の事を取り扱ふ爲に、難波に集つてゐる人達は、奈良の都からは一日行程の處ではあるが、やはり春愁に襲はれて都を戀しく思つてゐる。野邊には朝な／＼雲雀が高く揚つて囀つてゐる。その雲雀であつたなら、都へ行つてた易く歸つて來ることも出来るであらう。雲雀に寄せて郷愁が歌はれてゐる。

雲雀あがる春べとさやになりぬれば都も見えず霞たなびく

同じ時の家持の作である。空はすつかり霞み渡つて、都の方も見えすにたゞ雲雀の聲ばかりが聞えて來る。春の日に旅に出て都を思ふ心が描かれてゐる。うららかな景色に對して愁の慰められない氣持である。

春になつて櫻の花の咲き匂ふのは言ふまでもないことである。此處では同じく三月の頃難波に下つた時、龍田山を越えて、櫻の花を詠んだ高橋蟲麻呂の歌を見よう。往復の日にわけて、櫻の花の描寫が細くなされてゐる。

白雲の龍田の山の、瀧の上の小鞍の嶺に、咲きををる櫻の花は、

山高み風し止まねば、春雨の繼ぎてし零れば、秀つ枝は散り過ぎにけり、下枝に残れる花は、須臾は散りな亂れそ、草枕旅行く君が、還り來むまで

反歌

吾が行きは七日は過ぎじ龍田彦ゆめこの花を風にな散し

龍田山の櫻の花の、雨風が続いて襲ふので、上の方の枝から散り初め、下の枝はなほ残つてゐる有業が描かれてゐる。櫻の花の美しさ華やかさを歌ふ歌は多いが、その實際に目を留めて描寫してゐるのは珍しい。こゝに作者蟲麻呂の特色がよく現れてゐる。龍田彦は龍田山の神で風の神である。その神に花を散さないやうにと歌つてゐるのである。長歌としては比較的短い、所謂小品としての名作といつてよいであらう。

春さらば挿頭にせむと我が念ひし櫻の花は散り去にしかも

櫻の花は華やかではあるが、盛の短いのもつて惜まれてゐる。咲いたかと思ふ間にはかなく散り失せるのが潔いのである。この歌は櫻兒といふ名の嬢子が、二人の人に思はれて、身を置くによしなくして林の中に入つて死んだのを傷んだ歌である。その哀悼の意を

櫻の花の散つた事によつて叙してゐる。春になつたならば、自分が挿頭にしようと思つてゐた櫻は散つてしまつたといふのは、譬喩であつて、そのをとめを我がものにするを現してゐる。挿頭は時の花を折つて髪に挿すのをいふ。これも風流の業であつた。

春の野の下草靡き我も寄りにほひ寄りなむ友のまにまに

竹取の翁といふ者があつて、季春の月に丘に上つて遠く望むところに、たま／＼羹を煮る九人の嬢子に出遇つて、その席に連つたが、忽その嬢子たちに嫌はれたので歌を詠んで、昔若かつた時代の話をし、老翁を馬鹿にするものでない事を教へた。それに對する九人の嬢子の返歌の一首である。春の野に出て若菜を煮るのは、楽しい行事であると同時に若くならうとする爲の業でもある。空想を背景とした實際の情景であるのが面白いのである。春の下草が靡いてゐるやうに、自分も人々と同じく靡き寄らうといふ心を歌つてゐる。この竹取の歌と關係して次の如き歌もある。

春日野に煙立つ見ゆ嬢子等し春野の菟芽子採みて煮らしも

これは作者未詳の歌である。これは都のほとり春日野には煙が立ち上つてゐる。これは嬢子等が野に出て菟芽子を探んで煮るのだなといふのである。菟芽子は今日の嫁菜であり、

その楽しい行事の中にやはり信仰的な意味を傳へてゐるのである。かやうな行事のうちに三月も過ぎ春も暮れて行くのである。

四 月

花も散り若葉が萌えて四月になる。この頃から夏に入るのであるが、まだ春の名残の顧みられる事が多い。

春過ぎて夏來るらし白袴の衣ほしたり天の香具山

持統天皇の御製である。藤原の宮のあたりから香具山を御覽になると、青葉若葉に初夏の日が照り耀き、その邊の住民が干した白い衣が、強い光を反映してゐる。さわやかな初夏の風物をお詠みになつた御製である。

居り明しも今宵は飲まむほととぎす明けむあしたは鳴き渡らむぞ

四月一日に大伴家持の詠んだ歌である。この年は二日が立夏の節に當つた。霍公鳥は夏に入れば啼くといふので、その前夜にこれを待ち設ける心でこれを詠んでゐる。同じ家持

の長歌の一節にも、「木のくれ闇四月つづし立てば夜ごもりに鳴く霍公鳥」とも詠んでゐる。此處に居たまゝで夜を明すのを、「居り明し」の一語で現してゐる。このまゝ夜が明けるまゝで酒宴を催さうといふのである。霍公鳥が立夏の節を知つて来る譯ではないが、その來る事が概その季節に違はざる事を愛するのである。

玉に貫く花橘を乏しみしこの我が里に來鳴かずあるらし

同じく越中の國で、立夏の節を経て既に日を重ねてなほ霍公鳥の來り鳴かないのを詠んだ歌である。この歌は三月二十九日の歌であるが、この年は三月の中に立夏の節を迎へたのである。橘の花を緒に貫いてこれを愛する。しかし越中の國の風土は橘が極めて稀なので、霍公鳥が來て鳴かないのであらうと歌つてゐる。二三句は花橘を乏んで、橘が少い故にといふので、下のしは助詞で強く指定するだけである。此處にも季節に依つて訪れて來る鳥を待つ心が歌はれてゐる。

あしひきの山邊に居ればほととぎす木の間立ち漏き鳴かぬ日はなし

四月三日に同じく大伴家持が、久邇の京より弟の書持に報へた歌である。この京は山に

圍まれて居り、霍公鳥の聲に親まれてゐる處なのでこの歌が詠まれてゐる。木の間立ちくきは、樹間をくゞつてである。霍公鳥の聲を愛する事はもと大陸文學の影響から來てゐる。我が國では古くは顧みなかつたものである。萬葉時代に既にこの風流を愛する心があつて、平安時代に引き繼がれた。今日の人は都會に居ては容易に聞く事が出來ない。この爲にその聲を珍しく思ふ感情を育てゝゐる。奈良時代には澤山居たやうである。

あをによし奈良の都は古りぬれどもと霍公鳥鳴かずあらくに

都が久邇に移されて、奈良の都は廢墟となつてゐた頃の歌である。古き都であつてみれば霍公鳥はなほ訪れる筈であるが、その鳴かない寂しさを歌つてゐる。年々訪れるので親みを重ねてゐる意味に、もと霍公鳥と詠んでゐるのである。五句を、鳴かずあらくにの誤とする説があるが、もとの儘で通じる。

ぬば玉の月に向ひて霍公鳥鳴く音はるけし里遠みかも

これも家持の作である。四月十六日に歌はれてゐる。霍公鳥の聲を月の夜空に聞いたのである。後世の霍公鳥の歌の先驅をなす歌である。

藤浪の影なす海の底清み沈著く石をも珠とぞ吾が見る

四月十二日布勢の湖に遊覽して舟を多祢の灣に泊めて詠んだ歌である。これも家持の作である。春から夏にかけて咲く藤の花のもとに舟を停めて、清き湖水の底を望み見た歌である。美しい初夏の風景が描かれてゐる。

鵜河立ち取らさむ鮎の其が鱗は吾に搔き向け念ひし念はば

越中の國から越前の國に居る大伴池主の許に鵜を送つた家持の歌である。初夏の河瀬に鵜を浮べて魚を取る、古い歴史のある業が歌はれてゐる。鵜飼を催して得たところの魚の鱗は自分の方に向けよといふのは、自分を思ふ心のありなしを問ふのである。夏の風物としてこれもまた興味のある歌である。

吾が兄子が捧げて持たる厚朴あたかも似るか青き蓋

同じ時に僧惠行の詠んだ歌である。厚朴の葉は大きくて食物などを載せるに適してゐる。家持がその葉を折り取つて手にしたのを、かの何枚も葉が分れ出てゐる姿を青き蓋かと疑つたのである。こゝにも初夏の氣分が味はれる。

皇神祖の遠御代御代はい布き折り酒飲みきといふぞ此の厚朴

前の歌に應へた家持の作である。遠き昔はかやうな廣い葉を折り重ねて酒を酌み交した。

その風情を思ひ起してゐる。厚朴の説明の歌であるが、これを捧げ持つて客に示した家持の姿が思はれる歌である。

水傳ふ磯の浦廻の石躑躅もく咲く道をまた見なむかも

持統天皇の三年四月に草壁の皇太子の薨せられた時の、その宮の舍人等の詠んだ歌の一つである。皇太子の居られた島の宮の林泉には、躑躅が一ぱいに咲きあふれてゐる。その華やかさも今日はよしなく、別を告げる心が歌はれてゐる。華やかな景に對して、却つて無限の悲哀が感じられる。

木綿疊手向の山を今日越えていづれの野邊に廬せむ吾等

天平九年四月に大伴の坂上の郎女が賀茂神社に參詣し、ついでに相坂山を超えて琵琶湖畔に到り、夕方に歸り來つて詠んだ歌である。あたかも山野を跋涉する好季節になり、行き暮れて知らぬ野邊に廬するのも苦痛ではなくなつた頃として味ふべきである。歌の心には知らぬ野邊に宿りする心細さが感じられるやうに歌はれてゐるけれども、實はもつと明るい軽い氣持で詠まれてゐるのであらう。それを今日の人は、却つて寂しい氣持があるやうに感じてゐるであらう。都會人のもつ初夏の憂鬱とでも云ふやうなものが、現代の解釋

としては先に立つのである。

五月

萬葉時代の前期を飾る女流歌人額田の王には、幾多の美しい歌がある。次の歌もその豊麗な詞藻の一つとして知られてゐる。

茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

此の歌は天智天皇の七年五月五日に、天皇の蒲生野に獵せられた時の額田の王の歌である。五月五日は、陽數の重なる時として、萬物ごとく活動するので、特にその意味の行事の行はれる日である。此の日に行はれる獵を藥獵といふ。男子は鹿を捕つて、その角のいまだ袋になつてゐるものを得て藥とするのである。女子もまた野外に出でて藥草などを採る。この日に取つたものが特に効果が多いといふのである。そこで宮廷の王臣以下、悉く出でて獵をする。紫野といふのは紫草を栽培してある苑で、非常に嚴重な監督のもとに置かれてある禁園である。その紫野、即、標野であつて濫に人の入るを許さざる處であ

る。その禁斷の園生に立ち寄つて、君が袖振るのを野守は見えてゐるではないかといふのが、この歌の大意である。茜さすは、紫の枕詞であるが、美しい言葉で、茜と紫と並んでこの歌の色彩をなしてゐる。藥獵の日にたま／＼起つた出來事を傳へる歌として知られてゐる。

たまきはる宇智の大野に馬竝めて朝踏ますらむその草深野

舒明天皇が宇智野に獵せられた時の長歌の反歌で、別に藥獵としては傳へられてゐないけれども、夏の草深き野を獵せられるのであり、また天皇を始めまつり中皇命もお出ましになつてゐるので、それが藥獵である事は疑を容れない。その獵の日に中皇命の御命によつて間人連老の作つて奉つた歌である。たまきはるは枕詞、宇智の大野に馬を竝べてお立ちになつてゐるのを拜察し奉つてゐるので、雄大な氣分の感じられる歌である。十六の巻の、鹿の爲に痛を述べて作つた歌の中に、「八重疊平群の山に四月と五月の間に藥獵仕ふる時に」とも歌はれて居つて、四月から五月にかけて行はれてゐた事が知られる。

杜若衣に摺りつけ丈夫のきそひ獵する月は來にけり

この歌は四月五日に大伴家持が詠んでゐるが、杜若の花を衣装に摺りつけて丈夫のきそひ獵をすると歌つたのは、やはり藥獵と見られるのである。きそひ獵は衣服を著装ひて獵

する意味であつて、美しく著飾つて行く事を歌つてゐる。

春日野の藤は散りにて何をかも御狩の人の折りて挿頭さむ
この獵も藥獵である。藤の花を挿頭にして、春日野の草深い中を馳けまはる大宮人の姿が寫し出されてゐる。しかも藤の花は既に散つて、いまは挿頭にすべき花の無い事がこゝに描かれてある。

五月の花橘を君がため珠に貫く散らまく惜み

大伴の坂上の郎女の歌である。古人が珠を愛する事非常なものがある。五月になつて橘の花が白珠のやうに少しふくらみを見せてくると、これを緒に貫いて藥玉にかける。その風流は近世人の及び難いものがある。橘の花の散らんことを惜んで、君のためこれを玉の緒に貫いてゐる。説明的な歌であるが、花橘に對する愛情はよく描かれてゐる。

霍公鳥いたくな鳴きそ汝が聲を五月の玉にあへ貫くまでに

藤原の夫人の歌である。橘の花を玉に貫くまでは風雅な事實であつたが、更に進んでこゝには霍公鳥の聲を交へて貫かむといふ五月の風情を歌つてゐる。その聲を愛しそれを玉になぞらへて緒に貫くところに思ひ設けた風情がある。藥玉の飾に時の花を緒に貫いた時

代にあつて、初めて趣の感じられる歌である。

霍公鳥汝が初聲は吾にもが五月の珠に交へて貫かむ

これは作者未詳の歌であるが、同じく霍公鳥の初聲を戀ふる心からこれを玉に貫かうと歌つてゐる。

五月山花橘に霍公鳥隠らふ時に逢へる君かも

これも作者未詳である。五月山といふ名の山はあるではあらうが、こゝでは五月の山として解したい。その山の名からして五月の景をこゝに歌つてゐると見るべきである。花橘の繁みに霍公鳥が隠れてゐる。これも夏の景況の一つである。

霍公鳥來鳴く五月の短夜も獨し宿れば明しかねつも

此の頃は短夜として知られてゐる。美しい詞の中に含む哀怨の情が窺はれる。

我が兄子が宿のなでしこ日竝べて雨は降れども色も變らず

雨の降り続く頃で、その雨の日に瞿麥の花が可憐に咲き続けてゐる、といふ意味の歌である。大伴家持の作である。今日も雨、今日も雨、その陰鬱な霖雨のもとに大和撫子が美しく咲き騷つてゐる。その可憐な花を愛したのである。

あぶら火の光に見ゆる我が覆さ百合の花の笑まはしきかも

五月九日、秦石竹の館に宴した時に、大伴家持の詠んだ歌である。當時はあぶら火は明るいものとして感じられてゐた。その光のもとに照し出された百合の覆の美しさは人の心を打つに足りたのであらう。その花を見るより微笑が感じられると歌つてゐる。これも時の花の美しさを愛した歌と見るべきである。

紫陽花の八重咲く如くやつ世にをいませ我が兄子見つゝしのばむ

五月十一日に丹比國人の家に宴を開いた時に、左大臣橘諸兄が紫陽花に寄せて主人を祝つたのである。幾重にも重なり合つて咲いてゐるその花は、数の多いことを叙する材料としてふさはしいものである。この花の幾重にもなつて咲いてゐるやうに、幾重にも榮えませと言つたところに手段がある。これは結局紫陽花の特色を現したことになる。こゝにも夏の花の一つが歌に入つてゐる。この月はかやうな特色のある花の多い月である。

六 月

土代の暦では四月五月六月を夏とするので、六月は夏季にあたるのであるが、實際の季節は暦よりは約一月遅れるので、六月が一番暑い時になるのである。それでこの月は、水無月といひ暑熱の時期となされてゐる。

不盡の嶺に零り置ける雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり

作者未詳の不盡山の長歌の反歌である。六月の中でもその中央である十五日を以つて一番暑い日を現してゐる。四季雪を以つて蔽はれる不盡の高嶺も、この日だけは雪が消えるが、しかしまたその夜に降るといふのである。一年中消えずにゐるといふよりも、最暑い一日だけは消えるが、すぐその夜にはまた降るといふいひ方が効果的である。六月十五日を以つて暑熱の最激しい日とした現し方も巧妙である。

六月の地さへ割けて照る日にも吾が袖乾めや君に逢はずして

こゝにも六月を以つて最暑い月となす事が出てゐる。土までも裂けて照る日といふので夏の烈しい日さしが描かれてゐる。この歌も前と同じやうに一年中の極暑の時を擧げて、その日と云へども君に逢はずしては我が泣きぬれた袖は乾まいと歌つてゐる。集中、暑熱

を歌ふ歌は極めて稀であつて、唯これらのみが擧げられるに過ぎない。要するに生活上苦痛の季節であつて、これを歌にする餘裕を生じなかつたのであるが、こゝには烈日を描く必要から歌はれてゐるのである。この歌も作者未詳である。

渡る日の影に競ひて尋ねてな清きその道またも遇はむため

大伴家持が病に臥して無情を感じて道を修めんと欲し詠んだ歌である。六月十七日に作られてゐる。こゝには別に夏の烈しい日影は描かれてゐるのではないが、たまたま夏の暮れ難き日影の歌はれてゐる點に多少の興味がある。この長い一日中を無駄にする事なく道に志して行かうとするのである。清きその道は佛道を意味してゐるであらう。會ひがたきその道に會はんが爲に夏の長き日をかけて道を得ようとする心が歌はれてゐる。

この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか心足たもひに

天平感寶元年の大伴家持の作である。この年は閏五月六日以来旱天続きであつて、百姓の田畝には凋める色があつた。六月一日に至つて忽ち雨雲の氣はひを見て、その夕方に大伴家持の作つた歌である。この頃は暑い日が續くのであるが、農作物にとつては成長の時期であり、適度の雨量を必要とするのである。しかも屢々雨降らざることが續くので、こ

こに雨を請ふ必要があり、この歌もその爲に雨を希つてゐる。今見えてゐる雲がひろがりほびこつて、空かきくもり満足するまでに雨も降れかすと歌つてゐる。日毎の天象にも心を留めてゐるのである。

我が欲りし雨は降り來ぬ斯くしあらば言舉せずとも年は榮えむ

同月四日に家持の作つた歌で、遂に望んだ雨は降つて來た。かくの如くならば、言舉する事なくとも穀物の稔は十分であらうと歌つてゐる。言舉は、下の者から上位のものに對して申し出る意味であり、こゝでは神に對して祈願をこめる意味に用ゐられてゐる。我が國は神ながら言舉せぬ國と歌はれてゐる。すべて神のなし給ふまゝに自然に榮えて行く國であつて、言舉をしないのを本則とする。風雨時を得て順に音づれるのが、最望ましいのであつて、この月としては殊にそれが都合よく進行する事が喜ばれたのである。

吾が屋戸やどの萩咲きにけり秋風の吹かむを待たばいと遠みかも

六月十一日の家持の歌である。萩は秋咲くものとせられてゐるが、越中の國土は秋の訪れる事早くして、こゝに萩の早き花の咲くを見たのであらう。しかし季節はまだ夏であり、秋風の音づれて來るのには間がある。これに先だつて咲いた萩の花に、やがて秋の來んこ

とを知る。その暑い季節の下に既に秋の氣はひの動いてゐる事を感じたのである。

吾が屋前の萩の下葉は秋風もいまだ吹かねば斯くぞ黄變てる

天平十二年六月の家持の作で、時はづれの藤の花と萩の黄葉との二枝を折つて、坂上の大嬢に贈つた歌の一つである。これは奈良の都でのことであるが、こゝにもまだ秋風の吹かないのに、既に黄變した萩の下葉を取り立て、歌つてゐる。これは順當の季節の推移に依つて現れたものではないが、秋の物である萩の黄葉のまづ音づれたことに興味を感じて居り、秋ならずして秋の景物の現れたことに心を留めてゐるのである。四五句はまだ秋風も吹かないのに、かやうに黄葉したと云つてゐる。黄變てるはもみちを動詞にし、もみちてゐると云ふ意味に助動詞をつけて現してゐる。

七月

七月に入ると、秋の氣は既に動いて、大空の色にもそれと知られる。

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松かげに晚蟬鳴きぬ

天平八年の遣新羅使の一行中の一人の作である。この行は何月何日に出發したかは明でないが、秋になつたならば歸つて來ようと云つて來たものを、途中難風に遭つて往路筑紫の館に渡つて既に秋を迎へたのである。山松の蔭に晚蟬の鳴くを聞いて、秋のまさしく來たことを歌つてゐる。晚蟬は舊の七月になると鳴きはじめるのであつて、これも季節によつて音づれてくるものの一である。

秋萩ににほへる吾が裳ぬれぬとも君が御船の綱し取りてば

同じ時七月七日の夜天漢を仰いで大使阿倍繼麻呂の詠んだ歌である。この人は不幸にして新羅の地で死んでしまつた。その人の七夕の歌を見るのもあはれである。七夕は支那の古傳説に出てゐる。天に牽牛、織女の二星があり、各その職に勤めてゐたので、天帝がこれを憐んで結婚せしめたところ、その業務を怠るに至つたので、銀河を中に距て、住ましめ、一年に一度だけ會ふことを許したといふにもとづく。この夕、星を祭つて手藝の上達を願ひ、また詩歌を賦してその戀を憐むのである。この歌は、織女星に代つて詠んでゐる。秋萩で染めた吾が裳がよし濡れても、夫の乗つて來た船の綱を取り得たらば満足であるよしを歌つてゐる。美しい裳を著けた女子の、天の河邊に下り立つて、牽牛の船の綱を引き

寄せてゐる姿を想像してゐる。七夕の歌にふさはしい美しさをもつた歌である。

牽牛の嬋迎へ船榜ぎ出らし天の河原に霧の立てるは

山上億良の歌である。同じく彦星が妻を迎へる爲に舟を榜ぎ出してゐると想像してゐる。天の河原に霧の立つ秋の景色が歌はれてゐる。元來七夕の歌はもと想像の上に出てゐるのであるから、寫實風のものが少いのであるが、この歌は秋になつて川霧の立つ趣を描いてゐるところに風情があるのである。

吾が待ちし秋萩咲きぬ今だにも染ひに行かな遠方人に

人麻呂集から出た七夕の歌である。秋になつて萩の咲いたことにより、遠方に居る戀しき人の衣を染めに行きたいと歌つてゐる。織女星の心情を詠んだ歌である。

秋風の吹きただよはす白雲はたなばたつめの天つ領巾かも

想像の豊かなのがよいのである。天上を仰ぎみれば、白雲一片、秋風の吹くにまかせて颯々と飛んでゐる。それを織女星の領巾かと歌つてゐる。領巾は白い薄布で作られ、婦人の肩から掛ける衣装であるので、白雲をこれに見立てたのが適切に感じられるのである。

このゆふべ零り來る雨は彦星の早榜ぐ船の櫂の散沫かも

七夕の夕に雨の降り來るを牽牛が妻に會ふ爲に榜ぐ舟の櫂の飛沫かと疑つてゐる。こゝにも豊かな想像を見るべきである。

足玉も手珠も玲瓏に織る機を君が御衣に縫ひ堪へむかも

織女星の美しく身装をととのへて機を織つてゐる様を描いてゐる。上代にあつては機織は婦人の手藝としてこれをなすは上等の人と感ぜられてゐた。その機を織る嬢子の手足の珠のゆらめく様が描かれてゐる。これも美しい想像である。

秋風の清きゆふべに天漢舟榜ぎ渡る月人をとこ

これも七夕の歌であるが、こゝではむしろ月が主になつてゐて、その大空を渡る姿が歌はれてゐる。月を船に譬へることは漢詩にもあり、似合しき譬喩であるが、こゝには月を人格化し、その人が舟を榜いでゐると歌つてゐる。清らかな歌である。以上四首ともに作者未詳の歌である。

吾が岳にさを鹿來鳴く先芽の花嬋問ひに來鳴くさを鹿

大伴旅人の作である。秋になつて萩の花がまづ咲き出た風情を歌つてゐる。萩は鹿の妻であるといふ風流な想像から、その萩の花嬋を訪れに鹿が來て鳴くと歌つてゐる。鹿の歌

も多いが、今此處にこの一首を擧げておく。

宮人の袖つけ衣秋萩にほひよろしき高圓の宮

大伴家持の作で高圓の宮の秋の景色が歌はれてゐる。袖つけ衣は袖の先に端袖の附いてゐる長袖の衣であつて、大宮人の装ひである。その美しい著物を著て、萩の咲き匂ふほとりを歩いてゐる様が歌はれてゐる。

丈夫の呼び立てしかばさを鹿の胸分け行かむ秋の萩原

秋にもなつて鹿狩の季節にもなつた。この殺伐な業が美化せられて歌はれてゐる。勇士が立ち向ふ時に鹿が喜んで出て来るやうに歌つてゐる。一面の萩原の中を、さを鹿が、胸でおし分けて呼ばれる方へ進んで行くその姿が詠まれてゐる歌である。

斯くのみにありけるものを萩が花咲きてありやと問ひし君はも

天平三年七月に大伴旅人の薨じた時に資人の余明軍の詠んだ歌の一つである。旅人は九州にあつた時には奈良の都を慕ひ、その地を見たならばいやしき我が身も若がへるであらうと歌つてゐた。天平二年十二月に都に歸るに至つては、さらにまたその少年時代を過した明日香の地を戀ひ慕つてゐたやうである。天平三年の夏から秋にかけての頃、栗栖の小

野の萩の花の散りなん頃には行つて見ようと歌つてゐる。しかも病に臥して、萩の花が咲いてゐるかと傍の者に問ひながらその風流な一生を終つたのであつた。萬葉時代に於ける七月の出來事の一つとしてこれを記し留めて置く。

八月

八月になれば、秋もいよいよ深くなつて、野山の草もそれづくに花を著けてくる。古人の花を愛することは、一通りでないものがある。他に心を寄せるものが少く、生活の様式が單純であつただけに、花に心を惹かれることが多いのである。

秋の時花種なれど色別に見し明らむる今日の貴さ

これは大伴家持が、都に上る途中、宮中で秋の花の宴を開かれる時の詔に應ぜむが爲に、あらかじめ詠んだ長歌の反歌である。季節季節の花があり、殊に秋には花が多く、種々に咲くけれども、その一種ごとに御鑑賞遊ばされる今日の貴さを歌つてゐる。後の世の菊花の御宴にも比すべき風趣多き御行事である。

君が家に植ゑたる萩の始花を折りて挿頭さな旅別るとち

この時家持は隣國の越中の國の大伴池主の館で、都から上つて來た久米廣繩に會つてゐる。そこでこの歌があり、この家の庭に咲いた萩の花を折つてともに挿頭して別を惜んでゐる。挿頭さなは、かざしたいの意味に希望を述べてゐる。秋の花を手折つて旅の途中に別を惜む、往くものも歸るものも思出の多い別である。

石瀬野に秋萩凌ぎ馬竝めて始鷹獵だに爲すや別れむ

大伴家持がまさに都に上らうとして別を惜んだ歌である。これから鷹狩の季節が來るのである。萩の花を踏んで鷹を手にして獵をする、それをだに君と共にせずして、別れることの名残多いことを歌つてゐる。始鷹獵は、その年の秋はじめて行ふ鷹狩を云ふ。當時の地方官の風流見るべきである。

秋の野に咲ける秋萩秋風に靡ける上に秋の露おけり

同じく家持の歌で、秋の語を用ゐること多く、巧みを好んで却つて作りものに墮してゐるけれども、又秋の風懷を見るには足りよう。秋の景況を強ひるやうに疊みかけて歌つてゐる。

高圓の尾花吹き越す秋風に紐解き開けな直ならずとも

八月十二日の宴に大伴池主が詠んでゐる。高圓は奈良の都の東方に當る地名で、高原風の地勢をなしてゐた。その高圓野の尾花を吹き越して來る風に衣の紐を解いて悠々自適しようとしてゐる。五句の「直ならずとも」は、尾花に直接ふれずとも、それを吹き越す風によつて、その趣を我が身に受け入れようといふのである。直接でなくともの意味に解される。

秋の田の穂向見がてり我が兄子がふさ手折りける女郎花かも

八月七日の夜の宴に、大伴家持の詠んだ歌である。我が兄子は大伴池主をさしてゐるのであらう。この夜の宴に池主がふさくと女郎花を手折つて來た。その花は秋の田の稻穂の模様を見るついでに手折つて來た花である。女郎花は野に咲く花として親まれる。その趣の味はれる歌である。

をみなへし咲きたる野邊を行きめぐり君を思ひ出徘徊り來ぬ

前の歌に對する池主の反歌であつて、いかにも女郎花の咲いた野邊を徘徊して、君を思つて折つて來たのであると答へてゐる。宴に招かれて女郎花を折つて訪れる風情を味ふべ

きである。山上憶良の秋の七草の歌は有名であり、秋の野の花の優れてゐるものは、盡されてゐるが、その歌にも女郎花は入つて居り、古人が、深くこの花を愛した事が知られる。

朝戸開けてもの思ふ時に白露の置ける秋萩見えつゝもとな

この頃白露の置くことが多い。露は萩の花に宿つた風情が常に歌はれてゐる。この歌は天平十年八月二十日橘諸兄の家の宴に、文馬養の詠んだ歌である。朝戸を開けて見ると、白露の置ける秋萩がおのづからに目にふれて、秋の思ひを深からしめる、感傷的な歌である。

さを鹿の朝立つ野邊の秋萩に玉と見るまでおける白露

これも大伴家持の作で、やはり萩の花に置いた露を詠んでゐる。鹿の鳴く聲の耳につく頃で、こゝにも萩に鹿が配せられてゐる。

山彦のあひ響むまで妻戀に鹿鳴く山邊に獨のみして

この頃の朝けに聞けばあしひきの山を響しさを鹿鳴くも

同じく家持の作で、天平二年八月十三日に作つてゐる。鹿の聲は鋭くして秋の山邊に響

いて聞える。しかもそれは妻を戀ふる情の切々たるものがあつて、この點聞く人の心を打つことが強いのである。鹿の聲を聞いて痛む心が歌はれてゐる。

秋の夜は曉さむし白袴の妹が衣手著むよしもがも

大伴池主の作である。やうやく朝寒夜寒の季節となり、獨旅に出て家郷を思ふ情の切なるものがある。曉の寢覺に沁々と觸れた寒さが描かれてゐる。白袴は染めてない衣で麻などを云ふ。その妻の衣を著るよしもあれかしと歌つてゐるのである。

をとめらが玉裳裾びく此の庭に秋風吹きて花は散りつつ

八月十三日の内裏の宴に、安宿の玉の詠んだ歌である。宮仕の嬢子たちが美しい裳をひき延へて、庭前を緩歩してゐる。折しも秋風吹き來つて一面に咲いてゐる秋草の、花のほろ／＼と散り亂れる、その美しい景色が歌はれてゐる。今を盛と咲き亂れる時の花も、やうやく秋風の誘ひ來るのを如何ともなしがたき風情である。

今朝の朝け秋風寒し遠つ人雁が來鳴かむ時近みかも

これは大伴家持の作である。こゝにも朝早くして風の寒いことが歌はれてゐる。かくして秋はやうやく更けまさり、やがて北方から雁の訪れ來る時節が近づいて來る。遠方から

訪れくる雁を遠つ人と叙したところに、無限の感慨が宿される。その鳥の来る時期が近くして秋風の寒くなつたことを歌つてゐるのである。

九 月

昔の曆では、九月は秋の終になつてゐるけれども、今日から云へば、なほ秋たけなはの頃である。田園には稻が實り雁もやうやく訪れて来る。この頃の山の寂しさもまたひとしほである。

わが夫子を大和へ遣るとさ夜更けて曉露に吾が立ち霑れし

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

天武天皇が九月九日に崩御になり、つゞいて大津の皇子が竊に伊勢の神宮に赴かれた時に、姉君の大伯の皇女が御弟大津の皇子の都に上る姿を見送つて詠まれた御歌である。この生別、またいつ逢ふとも解らない心細さを二首の短歌に寄せて歌はれてゐる。夜いまだ深くして大和の方へ出で立つ弟君の、その前途を見送つてゐると、何時しか曉方の露がし

つとりと置いてすつかり濡れてしまつた。我が弟は二人で行つても行きかねる秋山を、いかにして一人で越えてゐるであらう。荒涼たる山路の思が皇女の御心を打つのである。この寂しさは秋の季節にして、殊に趣が深く感じられる。

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つゝ思ふな巨勢の春野を

大寶元年九月に持統太上天皇が紀伊の國に御幸せられた時に、坂門人足が葛城山の麓の巨勢の野で詠んだ歌である。一面に連つてゐる椿は秋の日ざしを十分に受けて、その葉が照り輝いてゐる。この秋の日の面白さは、春の美景を想像させるものがある。しかしこゝにはそれに依りて秋の野の美しさが描かれてゐる。

然あらぬ五百代小田を刈り亂り田廬に居れば京師し念ほゆ

大伴の坂上の郎女が竹田の庄にあつて詠んだ歌である。稻も刈り頃になつた。人々にあはず日を過して遙に京師を思つて詠んでゐる。收穫の時節の忙しさが間接ではあるが描かれてゐる。

吾が業なる早田の穂立造りたる覆ぞ見つゝ偲ばせ吾が夫

坂上の郎女の娘なる坂上の大嬢が稻で作つた覆を大伴家持に贈つた歌である。種を下し、

早苗とりから手を盡して育て、来たその稻で麩を作つて贈つた歌で、田園に對する當時の人人の立場が歌はれてゐる。この作者がみづから作つた稻では勿論ないけれども、それに親んで来たことは事實である。それをかやうなことに慣れてゐない都人の家持に送つて、田園の香を思はしめたのである。

九月ながつのその初雁の使にも念ふ心は聞え來ぬかも

遠江守櫻井の王が聖武天皇に奉つた歌である。今や雁の訪れて來る季節となつた。此處からそちらへ行く初雁の使に、思ふ心は寄せて送るのでありますけれども、それはそちらへも通じてゐるのではないでせうかと歌つてゐる。初雁の使に託して送る心を、雲井の空には聞き給ふや、いかに、といふのである。初雁の使は故事があるが、初雁の使に思を寄せ、思を送ると云つた點が面白いのである。

ひさかたの雨間もおかず雲隠り鳴きぞ行くなる早田雁がね

雲隠り鳴くなる雁の去きて居む秋田の穗立繁くし念ほゆ

此處にも雁の訪れて來る田園が歌はれてゐる。秋深き頃の風情といふべきである。いづれも大伴家持の作。

雨隠り情鬱いづみ出で見れば春日の山は色づきにけり

雨晴れて清く照りたるこの月夜夜くたちにして雲な柵引き

これもいづれも大伴家持の作である。此の頃は雨が多い。すべての草木を腐らせるやうに降る雨に、心も鬱陶しく閉ぢ籠つてゐたのであるが、たまく出て見ると春日の山はすつかり色づいてゐる。またその雨の晴れた夜の月の美しさ。このまゝ雲の隠すことのないやうにと思ふのも人情である。

九月ながつの時雨の雨にぬれとほり春日の山は色づきにけり

以下作者未詳の歌である。こゝには九月の雨があらゆるものを濡し、底の底まで徹つて行く氣持が歌はれてゐる。その雨に濡れ徹されてゐる春日の山が色づいて來た。季節の雨の催し來た景色が十分に描かれてゐる。

九月の白露負ひてあしひきの山のもみぢむ見まくしも良し

野にも山にも一ばいに置く白露に、山はやうやく黄葉初めて行く。それを樂みに見る心、それは古の人で始めて感じられるゆつたりした氣持である。人間世界に娛樂の少い時代にあつて眺められる山の姿である。

白露を玉になしたる九月の在明かりかの月夜見れど飽かぬかも
ま夜中から明るくなつて来る月の光に、庭一ぱいに置いた白露は、玉と輝いてゐる。こ
れも秋を置いては見ることの出来ない風趣である。

九月の在明の月夜ありつゝも君が來まさば吾戀ひめやも

この歌の初二句は、ありつゝもと云はん爲の序であるけれども、しかもその序は徒に置
いたのではない。この良夜を君が來まさずば、なんとも爲方がないの意味に歌はれてゐる。
たゞし調子がよく滑り過ぎて、いさゝか輕薄になつた感じがあるのは、やむを得ない所
ある。

誰たそ彼と我をな問ひそ九月の露に濡れつゝ君待つ吾を

袖も濡れそぼつまで、露に濡れて君を待つてゐるのを、怪んで問ふことなかれといふの
である。秋の露のしつとり置くなかに立ち盡して人を待つ氣持が歌はれてゐる。

九月の時雨の雨の山霧のいぶせき吾が胸誰を見ば息まむ

時雨の雨が霧のやうに山を蓋うて襲つて来る。そのやうな晴れやらぬ我が心は誰を見た
ら晴れゆくであらうか。山近く家居をしながら、九月の雨に閉ぢ籠められた寂しい氣持が、

その山霧を使つて序としたこの歌によつて現れてゐる。實景を序に取りなして行くところ
に手段が存するのである。

天雲のたゆたひ來れば九月の黄葉の山もうつろひにけり

天平八年の遣新羅使の一行が對馬にて作つた歌の一つである。都を出て遙なる路を天雲
の處定めぬやうにさすらひつゝ來れば、今、一面に染め盡した秋の山も既にうつろふ色を
見せて來た。秋も終になつたのである。都を出る時は秋になつたら歸つて來ようと約束を
したものを、その秋が空しく去り、錦を成した山の黄葉も、遂に旅先で衰へて行く。秋の
過ぎゆく寂しさがしみじみとこの旅人の胸を打つのである。かくて曆の上の秋が過ぎ去る
と共に、事實秋の景色も衰へて行くのである。

十月

曆の面はいよいよ冬になつて十月に入る。しかし實際の季節では秋の終の氣分が濃厚で
ある。時雨の雨の降りつゞく中に、紅葉の移ろひゆくのが目立つ頃である。

背の山に黄葉常敷く神岳の山の黄葉は今日か散らむ

大寶元年の紀伊の國への行幸の時の歌である。この時の行幸は九月から十月にかけて行はれた。大和を出る時にはなほ秋の闌の頃であつたが、今紀州からの歸りに背の山にさしかゝると、黄葉が一面に散り敷いてゐる。都近き三輪山の山黄葉も、今日は定めて散つてゐるであらうと推量してゐる。長い旅に出てゐた間に、季節の何時しか移り變つてゐるの心を傷ましめた歌である。この歌は柿本人麻呂歌集から出た歌と推測される。

時雨の雨間無くな零りそ紅ににほへる山の散らまく惜しも

天平十一年の十月の維摩講に、琴に合せて歌はれた歌である。維摩講は維摩大士の忌日に、維摩經を講ぜられるのを云ふ。琴に合せて歌はれた歌であるから、何時の作とも知られない。歌そのものは間なく降る雨の爲に山の紅葉の散りほひ行くのを惜んだ意味であるが、この場合は無常を傷む心が寄せられてゐるのであらう。秋深くなつて、草木の葉の枝頭を辭して行くのに、人生の無常を感じるの自然の情である。美しい言葉の中に潜む哀愁を味ふべきである。

黄葉を散らす時雨にぬれて來て君が黄葉をかざしつるかも

橘奈良麻呂の家の宴に、久米の女王の詠んだ歌である。黄葉を濡す時雨の雨にぬれて來て、その黄葉を挿頭にして遊んだ風情が歌はれてゐる。

奈良山の峯の黄葉取れば散る時雨の雨し間無く零るらし

同じ時の縣犬養吉男の作である。時雨の雨に濡れて、手を觸るれば散る黄葉のはかなさが歌はれてゐる。もう黄葉も枝にあるに堪へられなくなつたのである。

あしひきの山の黄葉今夜もか浮び去ぬらむ山川の瀬に

同じ時の大伴書持の作である。夜の間をも待たずに、黄葉は谷川の瀬に流れて行く。これを惜む情のよく現れてゐる歌である。

奈良山をにほはす黄葉手折り來て今夜かざしつ散らば散るとも

これも同じ時の三手代人名の作である。黄葉をかざして今夜共に遊ぶからは、もう散つてもよいと云ふ意味で類想の多い歌である。古人がかやうに自然の美しさに心を慰めた趣が窺はれる。

十月時雨に逢へる黄葉の吹かば散りなむ風のまにまに

これも同じ時の大伴池主の作である。時雨にあつた黄葉のもろさが歌はれてゐる。雨に

あつた黄葉は風が吹けば吹くまゝに散つて行くのである。これらの黄葉の歌は、いづれも十月十七日に集つて宴を開いた時の歌であるが、萬葉集ではこれを秋の部に收めてゐる。月から云へば既に冬に入つてゐるのであるけれども、秋の景物として見るべき黄葉を主としてゐるので、こゝに收めたものであらう。

九月の時雨の雨の山霧のいぶせき吾が胸誰を見れば息まむ。一に云ふ、十月時雨の雨降り

この歌は九月の時雨の雨が詠まれてゐるが、別傳として、一に云ふ、十月時雨の雨降りとしてゐるのは、時雨の雨が、九月、十月に互つていづれにしても通ずるからである。その雨によつて起される山霧から、四句のいぶせきをひき起してゐる。すでに九月の條にもあけて置いた歌である。

十月時雨の雨にぬれつつや君が行くらむ宿か借るらむ

十月雨間もおかず零りにせば誰が里の間に宿か借らまし

この二首は問答の歌である。この蕭々として降る雨に濡れながら君が行くことであらうか、或るいは何處かに宿を借りてゐるであらうかと歌つたに對して、この雨の止む間も無

く降つたならば、いづくの誰の里に宿を借るべきだらうかと歌つてゐる。問答としては平凡であつて、少しも情熱的な所がない。問ふ方もただいづれであらうかと疑つてをり、答へる方も雨が降つたらどこかに宿を借りようと歌つてゐるだけである。しかし十月の雨が旅する人にとつて煩しいものであつたことは感じられる。

十月時雨の常か吾が兄子が屋戸のみち葉ちりぬべく見ゆ

大伴家持が梨の黄葉を見て詠んだ歌である。この木の黄葉の今にも散りさうに見えるのは、十月に降る雨の常かと疑つてゐる。目に觸れた所を歌つたに過ぎないけれども、自然の移り變りに心を留めてゐる故人にして詠み得るところである。

百傳ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

大津の皇子は九月に密に伊勢に下り、そこから都に歸つて來たのであるが、謀叛を企てたことが現れて、十月に磐余の池のほとりで死を賜つた。その時に従容として、池上に鳴く鴨に別を惜んで詠んだ歌である。池面に十月の短い日の光が暮れてゆくのに、波に浮ぶ鴨は寒々と鳴いてゐる。しかしその聲を聞き、その姿を見るのも今日限りで、今これから自分は遠く天に歸つてしまふであらうと詠まれてゐる。死を見ること歸するが如く、従容

として、池上の鴨に別を惜まれた辭世の作である。季節はやうやく冬らしくなつて、池には水鳥が浮いてゐるのである。さういふ推移を心にとめて生きてゐた世界がここにも描かれてゐる。

十一月

春耕し夏耘つた耕作も、秋になつて成熟し長い間の勞苦は報いられて、收穫を見るに至る。そこでその後に来るものは、新に得た穀物を以つて神を祭ることであり、また耕した人々自身の心の安まりでもあるのである。十一月はちやうどその期節で、神を祭る時期とされてゐる。新嘗祭は宮中で行はせられる祭であるけれども、古くは民間に於いても行はれたことが傳へられてゐる。

天地と相榮えむと大宮を仕へまつれば貴くうれしき

天平勝寶四年十一月の新嘗祭の節會に、詔に應じて大納言巨勢奈氏麻呂の詠んだ歌である。この祭は極めて神聖な祭で、天皇御みづから新穀をもつて天つ神を祭られるのであり、

同時に天つ神からは、穀物をお授けになる儀と拜察せられる。この祭が年々行はれるといふ事は、太古に天つ神から、この瑞穂の國をお授けになつた事を傳へて行く上に意味があり、國家として重大な意義を有するものである。そこで天地のあらむかぎり、我が國が続きゆくあかしとして、この祭を行はせられる事の尊さを歌つてゐるのである。歌柄も雄大であつて内容にふさはしい作である。

大宮を仕へまつるは、新嘗祭の御宴を行はせられる爲に、宮殿を裝飾奉仕したことを云ふ。尊く且、うれしき新嘗祭が、よく描かれてゐる。

天地と久しきまでに萬代に仕へまつらむ黒酒白酒を

同じ時の歌で、文屋智奴の作である。ここにも天地のあらん限り永久にこの黒酒、白酒をもつて御祭を仕へまつらうと歌つてゐる。黒酒白酒は、その年の新穀を以つて作つた酒で、特に木の灰を入れて作つたのが黒酒である。この御酒を以つて神を祭るのである。

島山に照れる橘髻華に挿し仕へまつるは卿大夫等

これも同じ時の藤原八束の作である。冬に入つて橘の實の熟する頃となつた。その明るんだ橘を冠の上に挿して大臣以下の公卿が奉仕することを歌つてゐる。髻華は元來作り花

で、これを冠に挿して節會に奉仕したのを云ふ。ここでは橘を折つて鬘華として挿すことによつて風情を添へてゐる。鳥山は、この歌では御苑をさして云つてゐるのであらう。この尊い神事につゞく御宴に橘をさした風情が、豪華な形で歌はれてゐる。

天地を照らす日月の極無くあるべきものを何をか思はむ

天平寶字元年十一月十八日に内裏で行はせられた御宴の歌で、淳仁天皇がまだ皇太子にましました時の御歌である。この御宴は多分新嘗祭の御宴であらう。わが大いなる御國はあたかも大空を渡る月日の如く極みなくあるべきである故に、何をか思はんといふ意味に仰せられてゐる。御國を稱へた尊い御歌である。

いざ兒等香椎の潟に白袴の袖さへぬれて朝菜採みてむ

天平二年十一月に、大宰府の役人達が香椎の廟に参拜した時に、馬を香椎の浦に駐めて大伴旅人の詠んだ歌である。これも十一月は神社に参拜する例である。香椎の廟は今日の官幣大社香椎宮で、仲哀天皇と、神功皇后とを祀る。いざ兒どもといふのは、一緒に來て居る身分の低い人達を呼びかけてゐる。その香椎の潟に、白い織物の袖までも濡れて朝の菜を摘んで行かうといふのである。その人々は實際白い麻の衣を著てゐたと認められる。

朝菜は、ここでは海藻で、潟に下り立つてこれを拾つて行かうといふのである。そこで袖さへ濡れての句が、意味をもつて來るのである。旅人の作品中でもまた特に高雅な趣をもつて優つてゐる作である。

木綿疊手に取り持ちて斯くだにも吾は祈ひなむ君に逢はぬかも

天平五年十一月に大伴の坂上の郎女が氏神を祭つた時の長歌の反歌である。この民間に於ける祭は、女子が主となつて行つたもので、木綿疊の如きものを手に持つて、祭つたものと見える。木綿疊は楮や麻の如きもので織つた席である。それを持つて祭をすることは、作者自身としては、君に逢はんが爲であると歌つてゐる。

鳩鳥の葛飾早稻を饗すとも其の愛しきを外に立てめやも

東歌で下總の國の歌である。鳩鳥のは枕詞である。この葛飾の地に出來た早稻をもつて神を祭る。そのやうな神聖な夜でも、最愛のその君を戶外に立たせることはしないといふのである。その反面には、この夜は極めて神聖な夜で、男子や外來者を入れず、女子のみが獨家を守つて祭を行ふ事が知られるのである。民間に行はれた新嘗の夜の歌として注意されるものである。

玉映やす武庫の渡りに天づたふ日の暮れゆけば家をしぞ思ふ

大伴旅人は神龜五年に大宰帥となつて九州に下つたが、三年たつて天平二年十一月に大納言に任命せられて、都に上ることになつた。その年の十一月に、その従者達が、まづ大宰府を發して都に上る。その途中の海路で或る人の詠んだ歌である。

玉映やすは枕詞。玉の光りが映發する意味で、ゆかしいと云ふ意味のむかしにかゝつてゐる。武庫の渡りは、今日の神戸あたりの海上である。天づたふも枕詞であるが、日の枕詞にこの句を使つたのは、その日が大空を渡つて行くのを終日見守つてゐた感じがよく現れてゐる。今や一日も夕方になつて、一日中わが船の上を照してゐた日も、まさに海上に没せんとしてゐる。武庫の渡りで、その夕日のほのかな光が美しく島を照してゐる。この夕、殊に我が家を思ふ情が切であることを歌つてゐる。一首の中に二句まで枕詞を使い、それを有効に用ゐて來た點で、この歌の感じが深くなつて來てゐる。しみんと日の暮れゆく海上の旅愁を思はしめる歌である。

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹

天平八年十一月葛城の王等に橘宿禰の姓を賜つた時の聖武天皇の御製である。折しも橘

の實の熟する頃で、これは常緑樹にしてしかも冬になつて實の熟する樹である。霜が降つても、實も葉も又その花も衰へないと歌はせられてゐる。たゞ花は夏に咲くので、こゝでは句調の爲に特にこれを加へられておかれたのであらう。

消残りの雪に相へ照るあしひきの山たちばなを裏に探み來な

すべての物に訪れてしかも早く消えた、今わづかに残つてゐる雪に照り合つてゐる山橘の實を、裏に探んで行かうといふのである。山橘は今日の藪柑子で、古人はかやうな小さい實の成るものを愛したのである。これは古人が玉を愛する心から出たもので、あらゆる草木の小さい實を愛してゐるのである。

奥山の櫛が花の名の如やしくしく君に戀ひわたりなむ

櫛の花が歌はれてゐるのが珍しい。萬葉の作者は、かやうな物の數にもないやうな花に心を留めてゐる。ここではそのしきみといふ名にことよせて、しくしくを引き出してゐる。奥山に咲いてゐるしきみの花の名のやうに、重ね々自分も戀ひつつ日を送らうといふのである。心を留めて見れば、趣のあるその花が、今しきみといふ名によつて見出されて歌はれてゐる。

高山の巖に生ふる菅の根のねもころごろに降り置く白雪

十一月二十八日橋奈良麻呂の家で開いた宴に、その父の諸兄の詠んだ歌である。冬もいよいよ本格的になつて来て、雪もしばしば降るやうになつた。高山の巖に生ふるは、ねもころごろを引き出す爲の序であるが、これによつて雪の降り積つてゐる處が描かれてゐると見るべきである。ねもころごろはねむごろを重ねた用ゐ方で、極めて丁寧な意味になるであらう。あらゆるものを埋めつくす雪が降つてゐるのである。

十二月

十二月になつて寒氣は絶頂に達する。雨まじり雪降る夜の寒さは一入であり、世上の貧窮をこの夜に思ひ寄せた山上億良の貧窮問答の歌に、風まじり雨降る夜の雨まじり雪ふる夜はと歌ひ起した手段は適切であつたといふことが出来る。

沫雪の庭に零りしき寒き夜を手枕纏かず獨かも宿む

大伴家持の作である。特に十二月の作として記してはないが、雪の降りしく寒夜の情が

描かれてゐる。十二月の歌としては、

十二月には沫雪ふると知らねかも梅の花咲く含めらずして

の如き歌が有る。これは紀少鹿の女郎の歌である。知らねかもは、知らねばにやの意で疑問の條件法になる。雪を凌いで既に梅花が咲いたのを愛してゐる。衆花に先立つて開くこの花の清らかな性情が描かれてゐる。

今日零りし雪に競ひて我が屋前の冬木の梅は花咲きにけり

これは家持の作で、同じく雪中の梅を詠んでゐる。枝に散るは雪か梅か、見紛ふばかりの風情が描かれてゐるのである。

わが屋戸の梅咲きたりと告げやらば來ちふに似たり散りぬともよし

天平八年十二月十二日に歌舞所の人々が、葛井廣成の家に集つて宴を開いた時に、主人が古曲に擬して詠んだ二首の一つである。思ふ人に梅の花が咲いたと告げてやつたならば來よと言ふに似てゐる。さてその上は散つてもよいと云ふので、共に梅花を愛しようとする心が見えてゐる。この歌は古今集になつては「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふ

に似たり待たずしもあらず」となつてゐる。その方が心持は複雑で、歌ひもの風に傳へられてゐた歌であることが知られる。恐らくはこれはいづれも替歌で、いはゆる古曲と見なすべき古歌が存したのであらう。

み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし

天平寶字元年十一月十八日に三形の王の家に集つて宴を開いた時の三形の王の歌である。この年は橘奈良麻呂の變があつて、これが爲に罪せられるもの多く、死するものも少くなかつた。この事變を凌いで來ん春を持つ心が寓せられてゐるやうである。今や雪の降りつもる冬の真中であるが、やがて鶯の啼くべき春が間もなく訪れて來るであらう。春を待つ心が強く動いてゐる。冬は當時としても勿論好まじからざる季節であり、春を待つのは一般の人々に通つてゐる心であつた。

うち靡く春を近みかぬばたまの今宵の月夜霞みたるらむ

同じ時の甘南備伊香の作である。主人の歌に和して春の氣はひの既に動き來つた事を詠んでゐる。うち靡くは春の枕詞で、草木の靡く有様が描かれてゐる。今宵の月夜はすでに春の近く來たことを報じて霞んでゐる。冬の中に強ひて春を見出した作品である。

あらたまの年行き還り春立たばまづ我が宿に鶯は鳴け

同じ時の大伴家持の作である。今年の奈良麻呂の變には大伴氏の人々多く難にあつた。家持としては特に寂寥の感がある。春の、何處よりも眞先にまづ我が宿に訪れ來るやうにと歌つてゐる心は、思ふ事が多いのである。

月讀めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか

同じ月の二十三日に詠んだ家持の作である。曆面ではいまだ冬であるが、しかも霞は既にたなびいてゐる。これは春が來たのであらうかと疑つてゐる。曆の面と實際との矛盾をここに指摘してゐる。曆によつて知る處は智識であり、しかもそれは季節を大體支配してゐるけれども、往々にして前後することも多いのである。古い時代の歌は事實に即して詠まれたが、時代が下るに隨つて曆面に關心をもつやうになつて來た。こゝにも曆面を氣にしてゐることが見えてゐる。かくて今年も暮れて新しい年の來るのを迎へるのである。

然 自 · 人 · 神

號四一〇六三一號番員會協化文版出本日

昭和十七年五月一日 印刷
昭和十七年五月五日 發行

定價 二 圓

著 者 武 田 祐 吉

發 行 者 東 京 市 大 森 區 調 布 嶺 町 一 丁 目 三 四 七 錄 田 敬 止

印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 築 地 一 丁 目 十 四 番 地 川 橋 源 三 郎

發 行 所 東 京 市 大 森 區 調 布 嶺 町 一 丁 目 三 四 七 八 雲 書 林
授 替 東 京 一 六 三 〇 九 八 番

配 給 元 東 京 市 神 田 區 淡 路 町 二 丁 目 九 番 地 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

本 製 川 小 · 刷 印 所 刷 印 橋 川

八雲書林選書

<p>風卷景次郎著 神々與人間 價一・三〇 送二五</p>	<p>佐山 濟著 俳句文藝遠近 價一・五〇 送二五</p>	<p>蓮田善明著 鴨長明 價一・五〇 送二五</p>	<p>井上 豐著 國學論 價一・四〇 送二五</p>	<p>續刊 窪田空穂著 上代歌謡の文藝性 早川甚三著 香道 近藤忠義著 人間の文學 池田勉著 在原業平 齋藤清衛著 日本風の風土</p>
<p>古代から近世への文學の變化を、神々にかゝる言葉のわざと文學史の獨創的基礎的業績に移り行く處に構想した、風卷日本と必然の自覺に於て顧みしめられるであらう。</p>	<p>俳句及びその母體たる俳諧の發生より説き起し、その形成發展の次第が如何に日本精神の傳統、日本の文化の性格と關聯するかが、又將來如何に民族の抒情詩として永續するであらうかと、いふ點に重點を置いた、俳句文藝への愛情と批判の書。</p>	<p>從來の本明研究は、單に佛敎的思想を以て評價するに過ぎなかつたが、本書では、後鳥羽上皇の國天の御志と相通ひつゝ、近世國學者の眞に劃期的論文である。附、鴨長明年表。</p>	<p>新進學徒の手に成る新國學論。國學發展の跡を辿つて新國學の礎石たらしめんとしたもので、特に賀茂眞淵・本居宣長・富士谷御杖等の所説を具に検討して國學の眞精神の闡明顯揚に意を用ひてある。蓋し絶好の國學入門書。</p>	<p>源 豐 宗 著 桃 山 の 美 術 河 本 敦 夫 著 日 本 文 學 論 手 崎 政 男 著 有 古 今 心 小 島 吉 雄 著 新 和 繪 田 中 一 松 著 大 和 繪</p>

終